

11. 天気継続日数

稚内における月別の天気継続日数を、晴(全雲量0~7.9) 降雨雪(日降水量0.1mm以上)及び無降水(日降水量0.0mmを含む)について調べて見ると第12表の通りで、晴では継続日数2日以上のものでは4、5月が最も多く平均月4.4回、次が10月の4.2回であり、最も少いのは12月の0.9で冬季の少いのは当然である。又春、秋季には10日~2週間も継続する年もある。晴全日数でも春、秋が多く、7月が冬季に次いで少く(11.7日)、6、8月が同数(14.5日)である。降雨雪継続日数(冬季は除く)は3、4月及び9、10月では1週間位のものが月に1回あり11月に入ると10日~2週間位のものも毎年観測される。また各種継続日数より見て月別の天候は概ね次のようである。3月が全般に雪と曇が多く、4、5月が晴と曇、6月が曇(多少雨あり)、7月が曇と雨、8月が曇、9、10月が晴と雨の極端な天気、11月~2月が大体系雪で、冬季を除いては7月が最も悪く曇雨天の愚図ついた天候(霧期)である。(降雨継続日数は他の月より永くないが)最も良いのは5月、降雨の継続日数の短いのは8月で4~5日位のものが月1回位であ

る。

後記

今后各種個々のものについて詳しい調査が必要と思われるが、今回は、日常観測及び予報作業に参考とする為、又民生協力の資料として簡単に稚内の季節的な気象の概要を記して見た。

参考文献

1. International Cloud Atlas. 1956, W. M. O.
2. International Atlas of Clouds and of States of the Sky. 1932, I.M.O.
3. 藤原映平「雲」
4. W.E. Howell [The Classification of Cloud Forms] p. 1161-1166. Compendium of Meteorology. 1951.
5. 成田月昶:「宗谷管内における局地的な大雨」(研究時報 8巻9号) 1956.
6. 成田月昶:「宗谷管内の結霜と稚内の最低気温について」北部気象研究会誌 第4号 1947.
7. 成田月昶:「稚内の曇と降雨について」北部気象研究会誌 第4号 1947.

〔雲鏡〕 学会機関誌に権威を

日本気象学会の機関誌に権威があるのだろうか? 最近の機関誌をみて疑問に思ったので、一文を草してみた。

機関誌に掲載する論文は、原則として、学会の例会あるいは大会で講演し、討論を経たものであることは言うまでもない。この過程を辿らなければならないという目的は、討論によって研究内容の欠陥が是正され、より整った形にすることによって、機関誌の権威を維持するということであると考えられる。所が、発表された論文をみると、討論された点についての考察が少しも加えられずに機関誌に掲載されているのがよく見られる。それが、小欠陥ならともかく、前提となる仮設そのものがおかしかったり、演繹してゆく途中の解析に大きな飛躍があって、それが討論の問題点となった場合でさえも、全く顧

慮された様子がみえないのはどうしたことか。

以上の点に関しては、もちろん投稿者自身に問題があるが、編集部にも問題があるのではないだろうか。現象を考察する場合に、みる立場によって違った把握の仕方が起りうるので、そのような討論は、投稿者よりも編集部が討論として取上げるべきと思うが、学会で指摘された重大な間違いあるいは現象把握の粗雑さについては、編集部で十分検討し、整備して後に掲載すべきではないだろうか。もし、それが不可能ならば、学会で発表した際の討論者に、その論文に対する Comment を書いてもらって、はっきりと学会としての立場を明確にする必要があるのではないだろうか。殊に、気象集誌は、欧文論文を集めており、外国で容易に読まれる故、「天気」以上にこのようなことに対する注意が肝要であると思われる。

(奥田 穰)